

考えこじき

小川未明

青空文庫

ひと
人というものは、一つのことをじつと考^{かん}えていると、ほかのこ
とはわすれるものだし、また、どんな場合^{ばあい}でも、考^{かん}えることの自^じ
由^{ゆう}を、もつものです。

ある日^ひ、清吉^{せいきち}は、おじさんと町^{まち}へ、いつしよにいきました。
そして、おじさんが用^{よう}たしをしている、しばらくの間^{あいだ}、ひとり、
そのあたりをさんぽして待^まつことにしました。一けん^{みせ}の店では、
いろいろの運動器具^{うんどうきぐ}をならべ、のきさきに写^{しゃ}真^{しん}などをかけてい
ました。すべてスポーツにかんするもので、ちようど盛^{せい}夏^かも近^{ちか}づ
いたから、山岳^{さんかく}の風^{ふう}景^{けい}や、溪^{けい}谷^{こく}、海^{かい}洋^{よう}のけしきなどが、
目^めにもしたしまれたのであります。

そのなかの一枚まいは、のこぎりのはをたてたような、山脈さんみやくの姿すがたであつて、もつとも高いたかただきには、雪ゆきが白くしろのこつていました。おそらく、夏なつの間あいだじゆう、とけることなく、あたらしい雪ゆきが、またその上うへにつもるのであります。そのほかの山やまも、一つ、一つ、個性こせいがあつて、あるものは、なんとなくちか近づきがたく、あるものは、なつかしみのもてるようなものがありました。とはいうものの、どれもここからはとおいかなたにあり、いったとしても、のぼるのは、よいいではなかつたのです。

想像そうぞうするに、一日いちにちじゆう、つめたいきりがかかったり、はれたりし、はげしい風かぜに木立こだちがざわめき、鳥とりのなく声こゑのほかには、しんとして、べつにおとずれる人ひとも、まれだつたであります。

一年^{ねん}じゆうがそうであり、百年^{ねん}の間^{あいだ}が、そうであつたにちがいない。そしてこの山^{やま}々は、昔^{むかし}も、今^{いま}も、永^{えい}久^{きゆう}にだまつているのでした。

けずりをかけたような、がけの上^{うへ}に立^たち、谷^{たに}をへだてて、前^{ぜん}方^{ほう}のいただきを見^み上^あげる人^{ひと}があります。その人^{ひと}は、自然^{しぜん}を愛^{あい}するのために冒^{ぼう}険^{けん}をしたのでしよう。足^{あし}もとの下^{した}は、すぐ千^{せん}じんのそことなつて、急^{きゆう}流^{りゅう}が白^{しろ}ぎぬをさくように、みだれちらばっている石^{いし}につきあつて、しづきをあげています。

写^{しゃ}真^{しん}に見^みいつた清^{せい}吉^{きち}は、耳^{みみ}へ水^{みず}音^{おと}を、感^{かん}じるのでした。

「もし、この人^{ひと}が、自^じ分^{ぶん}だつたら。」

かれは、よくこんな空^{くう}想^{そう}をします。それから、かつてにその

先^{さき}をつづけるのでした。自分^{じぶん}は、はたして、このきりぎしの上^{うえ}に立つだけの勇氣^{ゆうき}があるうか。足^{あし}がわくわくして目^めがくらみはしないだろうか。ひつきよう、勇氣^{ゆうき}のないものは、いくら美^{うつく}しいものがあつても、鑑^{かん}賞^{しょう}するどころか、ただおそれをおぼえるぐらいのものだと思^{おも}いました。

写^{しゃ}真^{しん}から目^めをそらすと、自分^{じぶん}はあまりに異^{こと}なつた世^せ界^{かい}に立^たつているのでした。電^{でん}車^{しゃ}には、乗^{じよう}客^{きやく}が、すずなりにつかまつているし、トラックは、重^{おも}そうな荷^にをいっぱいつんで走^{はし}るし、自^じ転^{てん}車^{しゃ}は、たがいに競^{きよう}争^{そう}するようになら、前^{ぜん}後^ごにとんでいたのでした。

かれは、店^{みせ}さきをはなれ、ちがった意^い味^みのなまなましいゆうう

つを感じながら、下を見て歩くうちに、もうすこしで、道の上につきでた、鉄棒の先へつまずこうとしました。

「あぶない、なんだろう？」

すぎかけたのを、わざわざもどつて、それをみつめたのでした。たぶん戦災のなごりであろうか、なにかのこわれた金物が、道に埋まっています。

さいわい、自分は、つまずいてけがをしなかったが、だれか、けがをする人があるにちがいなかろう。そう思うと、かれにとつては、まったくつぜんのできごとだったけれど、そのままいきすぎしてしまうことを、良心が許さなかつたのでした。

「さあ、どうしたら、いいだろうか。」

いままで、頭あたまの中なかを占せん領りようしていた、ふかい谷たにや山やまも、また、きりや、雲くももどこへか、あとなく、煙けむりのようにきえてしまつて、そのかわり、きたないしみのように、現げん実じつのなやみが、全ぜん心しんをとらえたのでした。目めをとじたり、頭あたまをふつたりしてもすぐに解決かいけつのできぬことだけに、いらだたしい気き持もちとなりました。そして、早はやく、このなやみから、のがれる方ほう法ほうを見みいだそうとしたのでした。それには、ここに、一つの例れい外がいがある。

「よほどのとんまでなければ、これにつまずくものはない。」ということです。

もしそうきめられれば、なにも問もん題だいはないのであるが、はたして、この場合ばあい、だれにたいしても、こういう叡えい智ちを信しんずること

ができるだろうか。もし信しんじられぬとすれば、この後のちに起おこるであらうできごとじごとに、自分じぶんはまったく責任せきにんがないとはいえぬのであると考かんえられるのでした。

清吉せいきちは、じっさいについて、これを知しらうと、すこしはなれた電柱でんちゆうのところたに立たつて、往來おうらいの人々ひとびとのようすを見守みまもつたのであります。くつの人ひと、げたの人ひと、ぞうりの人ひと、また、ゴムたびをはいたものと、じつに、人々ひとびとのはきものは、いちようではなかつたけれど、どの人ひとも、その鉄棒てつぼうの頭あたまをふんだり、つまずくものはなかつたのであります。それは、みんなの注意ちゆういがいきとどくからとはいえなかつた。なぜなら、なかには、上うえをむいていくもの、横よこを見みながら、足あしもとには、てんで注意ちゆういをしな

いものもいるからでした。

考えればじつにふしぎなことですが。

「すべてが、偶然に支配されているとしか思えない。それに、人間には、つねに六感がはたらくからだろう。」

こうして、なんでもないとところに、かれは真理の顔がうかがわれるような気がしました。

ちようど、そんなことを考えているときでした。

「清吉、たいへん待たせて、すまなかつたね。」と、おじが、いそいでやってきました。

かれは、うしろに心をひかれながらも、おじといっしょに、電車に乗って、そこを立ち去らなければならなかったのでありま

す。そして、だれから、いわれたというわけではないが、かれは、そのままかえったのをひきようとして、みずからの勇氣なさを後悔うかいしました。わすれようとしても、目の前まえへ、つまずいておられる人の姿すがたが浮うかんで、自分じぶんを苦しめ、むちうったのであります。とちゆう、おじから、なにを話はなしかけられても、朗ほがらかな返答へんとうができませんでした。ちようど、その気持きもちちは、学が校こうで、いいくくら考かんええても、算術さんじゆつの答こたえがができななかつたたときののようように、頭あたまの中なかが、もやもやとしていたののでした。家いえへかええつつてかららも、ししつつここくく後こう悔かいががくりかえさされたたのでのです。

清吉せいきちは自分じぶんのへやへははいいつつて、ひとりひとりとなりなりました。そして、また考かんええここみみました。

「たしかに危険で、注意しなければならぬことだった。それをどうして、なんともせず、ほうつてきたのだろうか。」

かれは、自分に向かって、問いたですのでした。そしてみずから、答えるのでした。

なにもすることのできなかつたのは、要するに、自分に、勇気というものが、かけていたのだ。勇気さえあれば、正しいはんだんにしたがって、できるだけのことをしたであろう。そうすれば、いまごろ、なんのやくにもならぬ後悔など、しなくてもよかつたのだ。

清吉は、おのれの欠点と、良心を苦しめなければならぬ病所に気づいたとき、これからすぐにも金づちをたずさえ

て、さつきの場所へでかけていつて、鉄棒の頭を力いっぱい、
 たたきこんでこようかと、ためらいましたが、時間がたつにつれ、
 一時燃えた情熱もしぜんとうすらいでしまったのです。かれ
 は、勇氣も情熱もなければ、なまなかの良心は、ただみ
 ずからを不愉快にするばかりで、用のないものだとさとりました。
 そのうちに、とうとう、その日の晩方となりました。清吉
 は、あそびに外へでて、友だちと、道の上で、ボールをなげてい
 ました。なお、ときどき、ひるまのことを思い出して鉄棒の先
 が、目にちらつき、急になんだか、おもしろくなくなるのでした。
 そういえば、いま自分たちのあそんでいる道が、またなんとい
 たんでいることであろうと気がついたのでした。戦時中において

たあなが、まだそのままになつて居るのです。

「ねえ、きみ！ 夜分通る人が、このあなへおちないだろうかね

。」と、清吉は、道の上のあなをゆびさして、友だちにはなしかけました。

「さあ、おちるものもあるだろう。」

「けがをしないかね。」

「運が悪ければね、そのときの、ひょうしき。」と、友だちのひとりは、答えました。

そうきくと、清吉は、それだけですまされることだろうかと思つた。

「いったい、だれが、修繕しなければならぬのだろうかね。」

と、清吉せいきちは、いいました。責任せきにんをもつものの怠慢たいまんがはらだたしかつたのです。

すると、いつも元氣げんきで、快活かいかつなKケーが、

「どこかに責任せきにんはあつても、あまり多おほすぎて手てがつけられないのだろう。」と、答こたえました。

「はやくなおさなければ、老人ろうじんや、めくらがおちてあぶないがなあ。」

「そう、近所きんじよの人ひとが、氣きがついたら、早はやくなおせればなおすんだね。」

Kケーは、いつものように、にこにこして、ほとんど、むとんじやくでした。

ひとり、清吉^{せいきち}は、まだ考え^{かんが}こんでいました。こうしたことは、どこへうったえ出^でればいいのだろうか。こればかりでなく、身^みのまわりに、たくさん解決^{かいけつ}のつかぬことがあるような気がして、くよくよしたのでした。

「いったい、だれに責任^{せきにん}があるのだろうか。」と、清吉^{せいきち}はあくまでも思^{おも}ったのです。

「清^{せい}ちゃん、なにしてんの？ はやく、たまをおなげよ。」と、ケ^ケKは、さいそくしました。

「考え^{かんが}ていたのだよ。」

「どんなことさ？ 考え^{かんが}たつてしかたがないじゃないか。だれでも、できることは、自分^{じぶん}でするんだよ。考え^{かんが}こじきの銭^{ぜに}とらずと

「いうのだろう。」

「よし、わかった！　こんどは強いたまだぞ！」と、清吉は、
はじめてほがらかにさげびました。

「いいよ。」

まさに、日はくれようとしていました。そして、はるか西北
の、だいたい色の空に、むらさき色をしたひとつづきの山脈
が、頭をならべていました。それをみて、清吉は、写真にあ
った、山や谷を思い出しました。いまごろは、そこも、夕やみが
せまったであろう。そして、深山の静けさをやぶって、岩には
げしくつきあたる流れが、白くあわだつであろうと思いました。
せみの声に、耳をすましながら、往來に立っていると、かえ

りをいそぐ人々の顔にはよろこびがあふれ、みな愉快そうでした。

そのとき、Kの、大きな声が、夕映えの空に、はずみかえつて、Bや、Yと三人が、こちらへかけてきました。

「清ちゃん、道をなおそうよ。」といいました。みんなが、手に土をはこぶバケツや、くわをもっていました。

「ああ、なおそう！」

清吉は、自分にも気づいた、わるいくせをやぶり、明るい世界へつれだされて、みんなといっしよに、心からたのしく、星の出はじめるところまで、語ったり、笑ったりしてともにほたらき、熱心に道をなおしていたのです。

「かんが
考えこじき。」と、ケ₁の、いったことをおも
思いだして、清吉_{せいきち}が
笑_{わら}っていると、

「あすから、たまをなげるのにも、あぶなくないよ。」と、ケ₁は、
にここにこしながら、いったのでした。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 13」講談社

1977（昭和52）年11月10日第1刷発行

1983（昭和58）年1月19日第5刷発行

底本の親本：「赤い雲のあなた」小峰書店

1949（昭和24）年1月

初出：「子供の広場」

1946（昭和21）年7、8月合併号

※表題は底本では、「考《かんが》えこじき」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：酒井裕二

2018年9月28日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

考えこじき

小川未明

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>